

対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討

— 対人恐怖と社会恐怖の異同を通して —

清水 健 司* 岡村 寿 代**

本研究は、対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討を行うことを目的とした。認知特性指標は社会恐怖認知モデル (Clark & Wells, 1995) の偏った信念を参考に選定された。調査対象は大学生 595 名であり、対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデル尺度短縮版 (TSNS-S) に加えて、認知特性指標である完全主義尺度・自己肯定感尺度・自己嫌悪感尺度・ネガティブな反すう尺度・不合理な信念尺度・自己関係づけ尺度についての質問紙調査が実施された。その結果、分析 1 では各類型の特徴的な認知特性が明らかにされ、適応・不適応的側面についての言及がなされた。そして、分析 2 では 2次元モデル全体から見た認知特性の検討を行った。特に森田 (1953) が示した対人恐怖に該当すると思われる「誇大-過敏特性両向型」と、DSM 診断基準に準じた社会恐怖に該当すると思われる「過敏特性優位型」に焦点を当てながら詳細な比較検討が行われた。

キーワード：対人恐怖心性、自己愛傾向、認知特性、青年期

序 論

青年期は自己愛や対人恐怖が高まりやすい時期であるとされ、これらは発達課題である“自己の再構築”へ取り組む青年達に様々な影響を与えるものである。自己愛とは、自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒で彩られるように維持する機能 (Stolorow, 1975) と定義される。これは、ストレス状況下にあっても自己価値を見出そうとする健康的自己愛から、過度の誇大性・賞賛欲求、共感性の欠如等を呈する自己愛性パーソナリティ障害 (DSM-IV-TR, American Psychiatric Association, 2000 高橋他訳 2002) までを含む包括的な概念である。特に精神的自立を志向する青年期においては、自己の存在を承認されることが重要となるため、自己愛は表面化しやすくなる。このような自己に対する関心の集中、自信や優越感などの肯定的感覚を維持したいという一般的欲求は自己愛傾向 (小塩, 2004) と呼ばれる。

一方、対人恐怖は、他者から変に思われることを恐れて対人関係から回避しようとする特徴 (永井, 1994) を持つ。また、社会恐怖 (DSM-IV-TR American Psychiatric

Association, 2000 高橋他訳 2002) とは診断学的力点に若干の相違を見せるものの、互いに“恥の病理”である点にて中核的な共通項を有している。この対人恐怖は思春期の一過性水準から、関係妄想・自我漏洩症状を伴う重症対人恐怖までを含む包括的な概念である (鍋田, 2007)。特に青年期では公的自意識の増大に伴い、対人関係の距離感に戸惑いや緊張が生じやすくなる。このような一般的な水準における人見知り・過度の気遣い・対人緊張は対人恐怖的心性¹ (永井, 1994) と呼ばれる。

自己愛傾向と対人恐怖心性は、実証研究領域では既に馴染み深いものである。しかし、各々を別主題とする研究に比較すると両主題を同時に扱うものは国内外でも少数に限られる。この現状は、自己愛と対人恐怖における関連性の弱さを反映しているのだろうか。

しかし、臨床領域では各々について対照的な 2タイプ²の存在が指摘されており、そのなかでも清水・川邊・海塚 (2008) は、過敏型自己愛 (Gabbard, 1994 館監訳 1997) と森田 (1953) による対人恐怖の近似性について触れている。

まず過敏型自己愛では、潜在的な誇大性と他者評価

* 信州大学人文学部
〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1
kshimi@shinshu-u.ac.jp

** 兵庫教育大学大学院臨床・健康教育学系
〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1
hisayoo@hyogo-u.ac.jp

¹ 本論では一般青年における対人恐怖の心理的傾向を堀井・小川 (1997) にない“対人恐怖心性”と表記する。ただし、ほぼ同概念と考えられるのが岡田・永井 (1990)、永井 (1994) では、“対人恐怖的心性”と表記されている。正確な引用を行うため、これに該当する部分では原文通り“対人恐怖的心性”との表記を用いた。

に対する過敏さ、羞恥・屈辱感情の感じやすさ、注目事態からの回避傾向、強迫性・完全主義(上地・宮下, 2004; Ronningstam, 1998 佐野監訳 2003) などの特徴が指摘されている。また、他方では顕在的な誇大性と他者評価に対する鈍感さを特徴とし、自己愛性パーソナリティ障害の DSM 診断基準を如実に反映する無関心型自己愛も提示されている。このように、自己愛には臨床領域において対照的な 2 タイプが示唆されている。

一方、対人恐怖は、森田 (1953) が赤面恐怖を「恥づかしがることをもって、ふがいなしとする」と評したように、自己の羞恥を受容できないゆえに苦悩を深めてしまうとの、強迫観念の一種として位置づけられている。また、近年では強迫性・自己愛型(西岡, 1999)、平均的対人恐怖症(鍋田, 2007)とも表現される。主な特徴には羞恥感情への恐れ、他者評価への固執的態度、卑下的自己を強迫的に否定することで逆に不安が増強されてしまう“とらわれ”が挙げられる。他にも完全主義・過度の内省・自信欠如・自己中心性の指摘も見受けられる。また、他方では羞恥感情への恐れ・回避行動を主題として、社会恐怖の DSM 診断基準を如実に反映する羞恥型・回避型(西岡, 1999)・単純型対人恐怖症(鍋田, 2007)も提示されている。このように、対人恐怖にも臨床領域において対照的な 2 タイプが示唆されている。

無論、パーソナリティ障害圏にある過敏型自己愛と神経症圏にある対人恐怖は、人格構造上異なる力動を持つため、病態像を完全一致させるとは考えにくい。しかし、岡野 (1998) では、対人恐怖を過敏型自己愛の問題として理解を試みる有用な視点が示されており、Gabbard (1994) も過敏型自己愛の症状に社会恐怖の重複を認めている。更に、両タイプには屈辱・羞恥感情の生起しやすさ、潜在的な誇大性、強迫性・完全主義等の多岐にわたる共通点が示唆されている。これらを鑑みると、微視的には病理水準を示す両タイプにおいて病態像の一致を認めることはできない。ただし、巨視的には両タイプを、健常から病理水準まで網羅することを前提とした“自己顕示欲の強さ”と“恥に対する敏感さ”を重複させる領域のなかで布置されるもの

として捉えることは十分に可能であると思われる。

これを受けて清水・川邊・海塚 (2007) は実証的観点から横軸に対人恐怖心性(過敏特性次元)と縦軸に自己愛傾向(誇大特性次元)を布置した対人恐怖心性-自己愛傾向 2 次元モデル(以下、2 次元モデル)を作成した。Figure 1 に過敏型自己愛と対人恐怖、無関心型自己愛と社会恐怖に準ずるタイプに加え、それに対応する 2 次元モデルの非臨床類型(5 類型)の関係を示した。清水他(2007, 2008)では、共に強い対人恐怖心性を持つ、誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型の 2 類型にてバランスの悪い自意識、ストレスに対する脆弱性が示唆されている。これは該当する青年達における何らかの“生きにくさ”を推測させるものである。そのため、この 2 類型の不適応観に関連する要因検討には、彼らの精神的健康の回復に向けた効果的介入への有益な示唆を含む可能性がある。

この個人の適応観に関連する要因として認知特性を重視するものに認知行動療法がある。これは、認知・行動・感情の悪循環過程に対して内省を行い、認知変容から問題解決を志向するものであり(鈴木・神村, 2005)、各疾患に対応した症状維持モデルの提示から治療・研究において急速な発展を見せている。その一つである社会恐怖認知モデル(Clark & Wells, 1995)では、脅威的な社会状況における不安維持メカニズムが示されている。社会恐怖患者は、不安喚起場面にて自己に対する偏った信念を活性化させ、不安を増幅させる。その結果、実際のパフォーマンス低下や脅威刺激からの回避によって恐怖を強化させてしまう過程をたどるとされている。この自己に対する偏った信念(認知特性)には①極端に高い対人評価基準(ex. 私は皆から承認されなければならない)、②社会的状況に関する条件つき信念(ex. もし失敗したら、他者は私を拒絶するだろう)、③自己の無条件信念(ex. 私は変だ; 私は魅力的ではない)が挙げられる。また、他にも④既に終了した社会的相互作用をあれこれと考え込んで(post-mortem)否定的な自己知覚を強める点や、自分の思い込みが作り出した“イメージ上の他者”からの被注察感を意識する⑤観察者視点の自己注目(丹野, 2001)が指摘されている。

個人の認知特性が精神的健康に少なからず影響を及ぼすことを考えると、2 次元モデルにおいて強い対人恐怖心性を示す 2 類型(誇大-過敏特性両向型・過敏特性優位型)の認知特性に注目することには不適応観の改善に繋がる知見が期待される。従って、本研究では社会恐怖認知モデルの援用から各類型における認知特性の検討を目的とする。方法にて、本研究で使用する認知特

² 本論では、2 タイプ・2 次元・2 類型と混同されやすい用語が頻出する。混乱を避けるため、「2 タイプ」は病理水準にあたる対人恐怖と自己愛の分類を指す場合のみに使用した。また、「2 次元」は対人恐怖心性と自己愛傾向の 2 軸から成る実証モデルを指す場合のみに使用した。また、「2 類型」は 2 次元モデルにおける誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型を指し、「類型」は実証モデルにおける個々の非臨床類型を指すものとして統一する。

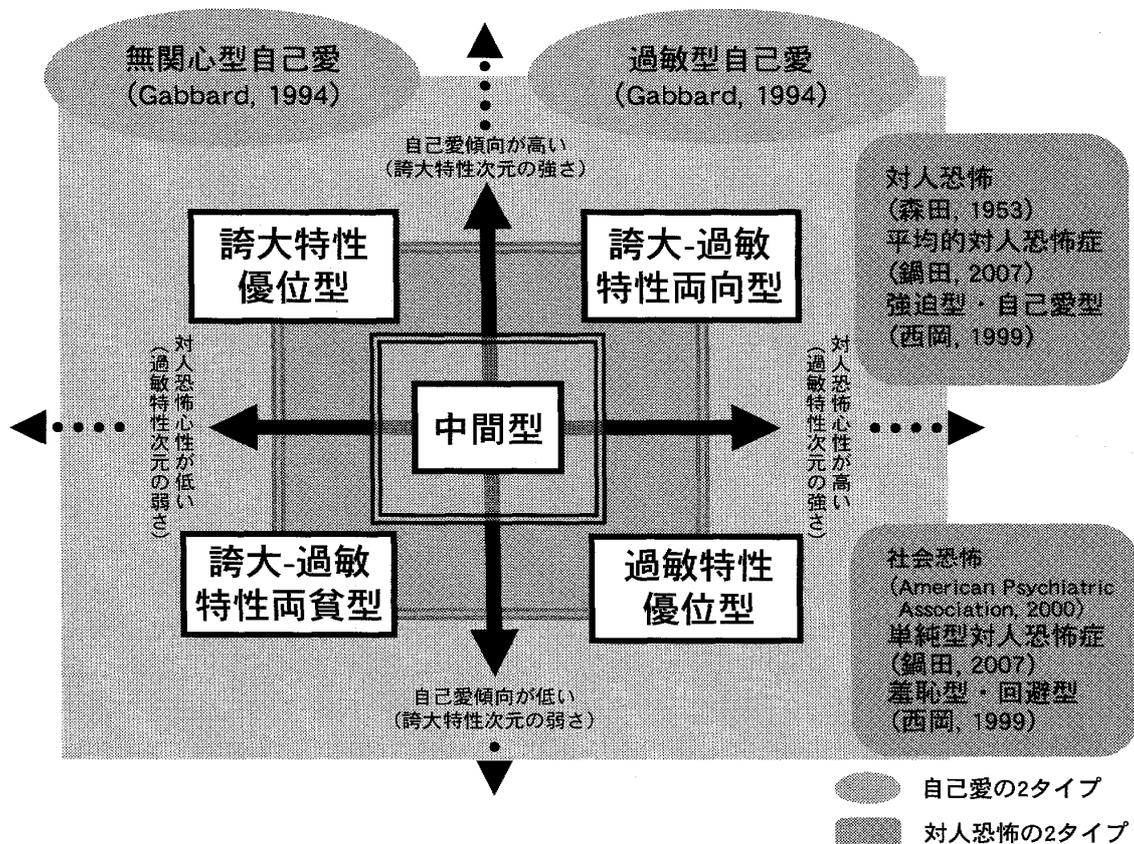


Figure 1. 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルと自己愛および対人恐怖の 2タイプにおける布置関係

性指標と社会恐怖認知モデルにおける偏った信念 (①~⑤)の対応関係について述べる。分析1では各類型における認知特性の明確化を行い、分析2では2次元モデル全体から認知特性を概観する。

方 法

調査協力者と手続き H県内の大学生 595名 (平均年齢は 19.4歳, $SD=1.40$ 歳, 男性: 293名 女性: 302名) を対象に無記名, 集団形式にて実施した。

質問紙の尺度構成

対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデル尺度短縮版 (TSNS-S) 類型判別のために清水他 (2008) を用い, 対人恐怖心性・自己愛傾向の 2領域からなる全 20項目について 7段階で評定を求めた。本尺度は, 小塩 (2004) の NPI-S (ex. 私は, 才能に恵まれた人間であると思う) から抜粋された, 自己の肯定的感覚を維持したい欲求を測定する 10項目と, 堀井・小川 (1997) の対人恐怖心性尺度 (ex. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない) から抜粋された, 恥に対する過敏性を測定する 10項目から構成される。

ネガティブな反すう尺度 ストレスフルな出来事の経験後, 事象を長い間繰り返して考える (伊藤・竹中・上里, 2001) 傾向である。伊藤他 (2001) は, “ネガティブな反すう” と “ネガティブな反すうのコントロール不可能性 (以下, 統制不能)” の 2 因子を設定した。前者は事後事象を否定的に考え続ける特性 (ex. 同じ嫌な事を何度も繰り返して考える傾向がある) であり, 後者はネガティブな反すうを自分では統制できない特性 (ex. 嫌なことを考えていても, それに没頭せず何らかの行動をとることが出来る, *逆転項目) を指す。本指標は④に対応すると想定されたため, 伊藤他 (2001) を用い, 11項目について 7段階で評定を求めた。

完全主義尺度 物事に完全性を求める傾向で, 高い目標設定を迫及しようとする認知である “高目標設置” (ex. 目標は高いほどやりがいがある) と, ミスや失敗に対する自己批判的認知である “ミスへのとらわれ” (ex. 失敗したら, 私の価値は下がるだろう) に代表される。本指標は①②に対応すると想定されたため, 自己志向的な完全主義認知を測定する小堀・丹野 (2004) を用い, 15項目について 4段階で評定を求めた。

不合理な信念尺度 合理情動療法における不適切信念で、論理的必然性のない前提を“～ねばならない”と絶対視する must 思考体系(森・長谷川・石隈・嶋田・坂野, 1994)を指す(ex. 私はすべての点で有能でなければならない)。本指標は①②に対応すると想定されたため、森他(1994)を用い、20項目について5段階で評定を求めた。

自己嫌悪感尺度 客観的事実とは無関係に、否定的感情が自分に由来するものだと自分自身を嫌だと感じる(水間, 1996)傾向である。自己のネガティブ体験に焦点を当てる認知(ex. 自分を嫌になることがある)であるため③に対応すると想定された。水間(1996)の自己嫌悪感尺度のうち、因子負荷量が大きい5項目を選定して5段階で評定を求めた。

自己肯定感尺度 本研究では、認知特性として自己のネガティブ体験に焦点を当てた先述の自己嫌悪感と、自己のポジティブ体験に焦点を当てた自己肯定感を加えて“自己観”を構成する。そこで、児玉・片柳・嶋田・坂野(1994)による肯定的思考を自己肯定感として扱った(ex. 何が起ころうとも、うまく切り抜かれる)。児玉他(1994)の肯定的思考尺度のうち、因子負荷量が大きい5項目を選定して5段階で評定を求めた。

自己関係づけ尺度 他者の何でもない仕草を否定的に自己へ関係づける傾向(金子, 2000)であり、自己を社会的対象と認知した被害妄想的思考を指す(ex. 話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる)。社会恐怖患者は自己注意を他者視点に自動シフトさせ、客観性を欠いた自分の否定的印象を形成する(Clark & Wells, 1995)ため⑤に対応すると想定された。金子(2000)の自己関係づけ尺度のうち、因子負荷量が大きい6項目を選定して5段階で評定を求めた。

分析 1

結果と考察

TSNS-S に対して固有値1以上を因子の抽出基準とする因子分析(主因子解-Promax 回転, 以下同様の手順)を行った結果、清水他(2008)と全く同様の因子パターンを示し、“対人恐怖心性領域”と“自己愛傾向領域”の2因子を抽出した。因子間相関は弱い負の相関($r = -.19$)を示し、 α 係数は順に.82, .80であった。また、類型判別は清水他(2008)と同様の基準を用いて実施した(Appendix 1を参照)。

また、完全主義尺度とネガティブな反すう尺度に対して因子分析を行った。その結果、前者は“高目標設置”と“ミスへのとらわれ”を、後者は“ネガティブ

な反すう”と“統制不能”を抽出した。そして、自己嫌悪感・自己肯定感・自己関係づけ尺度では次元性の確認を行い、各因子に該当する項目の合計得点を算出した。これに不合理な信念尺度の全項目合計得点を加えた8変数を認知特性指標とし、 α 係数(Table 1)から十分な内的整合性が確認されたため、以下の分析では全指標を用いた。各因子の項目構成は概ね先行研究に準ずるものであり、因子名は方法にて示した代表的な項目内容にほぼ対応するものだった。

Table 1 に TSNS-S の2領域と認知特性の相関係数を示した。その結果、対人恐怖心性領域では自己肯定感と中程度の負の相関($r = -.48$)、高目標設置を除いた他変数と中程度の正の相関($r = .38 \sim .56$)を示した。従来、対人恐怖的心性¹においては、自己評価と負の相関(岡田・永井, 1990)、対人恐怖心性と自己関係づけにおいては正の相関(金子・本城・高村, 2003)が報告され、Rosser, Issakidis, & Peters (2003)では社会恐怖尺度とミスへのとらわれが正の相関を示し、Kocovski, Endler, Rector, & Flett (2005)では高社会不安群が強い反すう対処と否定的な非現実思考を示すことが報告されている。これらは、本研究の結果を支持するものである。また、自己愛傾向領域では高目標設置と弱い正の相関($r = .28$)、自己肯定感と中程度の正の相関($r = .43$)を示した。自己愛傾向は、Trumpeter, Watson, & O'Leary (2006)にて自己志向的完全主義や自尊心と正の相関を示すことが報告されており、これも本研究の結果を支持するものである。

そして、各類型の認知特性を検討するため2次元モデルの5類型を要因に、8認知特性を従属変数とした多変量分散分析を行った。その結果、群間の差を示すWilksのラムダが有意であったため($\Lambda = .46$ $p < .05$)、個別に分散分析を行った。なお、Type I error に留意するため、Bonfferoni法にて有意水準を $p < .0063(.05/$

Table 1 対人恐怖心性・自己愛傾向領域と認知特性の相関係数

| | 対人恐怖心性領域 | 自己愛傾向領域 | α 係数 |
|-----------|----------|---------|-------------|
| 高目標設置 | -.03 | .28* | .80 |
| ミスへのとらわれ | .38* | .08* | .84 |
| 自己肯定感 | -.48* | .43* | .76 |
| 自己嫌悪感 | .52* | -.15* | .92 |
| ネガティブな反すう | .50* | -.06 | .86 |
| 統制不能 | .40* | -.19* | .78 |
| 不合理な信念 | .43* | .08* | .75 |
| 自己関係づけ | .56* | -.01 | .89 |

* $p < .05$

Table 2 2次元モデルの5類型における認知特性の平均値と標準偏差

| | 過敏特性優位型 | | 誇大-過敏特性 両向型 | | 誇大-過敏特性 両貧型 | | 誇大特性優位型 | | 中間型 | | F-Value | 多重比較 (Tukey 法) |
|-----------|---------|-------|----------------|-------|----------------|-------|---------|-------|-------|-------|---------|-------------------------|
| | n=142 | 23.8% | n=113 | 19.0% | n=98 | 16.6% | n=139 | 23.3% | n=103 | 17.3% | | |
| 高目標設置 | 14.4 | (3.7) | 15.7 | (3.8) | 13.3 | (3.7) | 15.9 | (4.0) | 14.0 | (3.1) | 10.4* | 両貧：中間：過優<両向：誇優 |
| ミスへのとらわれ | 21.3 | (5.5) | 22.3 | (5.6) | 17.0 | (4.4) | 18.5 | (5.0) | 19.0 | (4.7) | 20.3* | 両貧<中間<過優：両向，両貧：誇優<過優：両向 |
| 自己肯定感 | 13.3 | (3.5) | 15.9 | (3.6) | 16.2 | (2.9) | 18.7 | (3.1) | 15.8 | (2.6) | 50.3* | 過優<中間：両向：両貧<誇優 |
| 自己嫌悪感 | 20.6 | (4.0) | 18.9 | (4.7) | 14.5 | (5.3) | 14.6 | (5.8) | 17.5 | (4.0) | 39.1* | 誇優：両貧<中間<過優，誇優：両貧<両向：過優 |
| ネガティブな反すう | 28.0 | (6.8) | 28.2 | (6.3) | 22.2 | (6.9) | 21.8 | (7.8) | 24.4 | (5.7) | 25.5* | 誇優：両貧<中間<過優：両向 |
| 統制不能 | 21.2 | (5.4) | 20.4 | (5.4) | 17.5 | (5.5) | 16.5 | (5.6) | 19.1 | (4.3) | 17.1* | 誇優：両貧<中間：過優：両向 |
| 不合理な信念 | 64.9 | (9.1) | 66.6 | (9.1) | 57.6 | (8.1) | 59.9 | (8.0) | 62.3 | (7.0) | 21.7* | 両貧<中間<過優：両向，両貧：誇優<両向 |
| 自己関係づけ | 20.1 | (5.8) | 20.0 | (5.5) | 13.7 | (5.2) | 14.8 | (5.6) | 18.0 | (4.8) | 34.5* | 誇優：両貧<中間<過優：両向 |

* $p < .0063$

注) 過優：過敏特性優位型 両向：誇大-過敏特性両向型
両貧：誇大-過敏特性両貧型 誇優：誇大特性優位型 中間：中間型

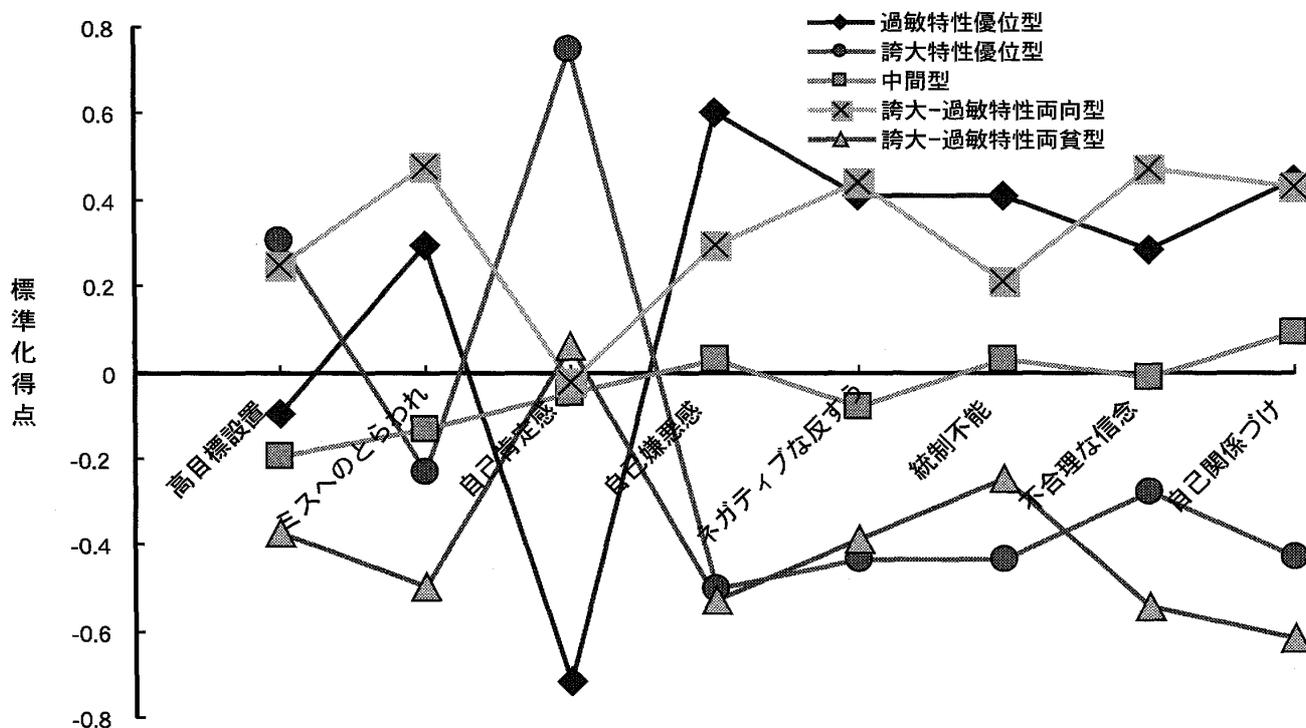


Figure 2 各類型における認知特性の平均値

8)に切り下げた。その結果、全てに有意な主効果が見られ、更に Tukey 法による多重比較 ($p < .05$)を行った (Table 2)。また、各認知特性を標準化得点に変換した後の平均値を Figure 2 に示した。以下に、実証的・臨床的知見から各類型の認知特性について考察を行った。

過敏特性優位型 高目標設置は平均をやや下回るが、ミスへのとらわれは高い。自己肯定感は低く、自己嫌悪感が高い。また、他指標は何れも高い。この結果は、社会恐怖認知モデル (Clark & Wells, 1995) の信念に対して“極端に高い対人評価基準”を持たない点を除けば概ね反映するものであった。これは、否定的自己観に

苦悩しながら社会的状況での失敗を強く恐れる姿を示唆するものである。鍋田 (2007) は、単純型対人恐怖症は一定の他者評価を獲得したい欲求を持つものの、人前での失敗を恐れて回避的方略にて自己防衛を行うと述べる。また、過度に理想化された自己を強迫的に追求することで脆弱な現実自己を隠蔽しようとする姿は希薄であることも指摘する。従って本類型は、自己の高みを完全追求する姿勢は弱い、“何事も失敗してはならない”との非現実的な認知を土壌としている。また、徹底した否定的自己観のため、自己を他者視点からネガティブに判断しやすく、失敗を繰り返し考え込

む悪循環から抜け出せない認知特性が示唆される。

誇大特性優位型 高目標設置が高く、ミスへのとらわれは低い。自己肯定感が高く、自己嫌悪感は低い。また、他指標は何れも低い。本類型は、達成を確信しながら独自に高い目標設定を行い、清水他(2008)にて外向性・精神的健康の高さが指摘されるように、随所で自己主張・統率力が発揮できる精力的態度が示唆される。これには、人格の歪みを呈する無関心型自己愛に見られるような深刻さは考えにくく、強い積極性を土壌として他者との協調性を見失わない範疇にあれば円滑な社会的相互作用が可能であることが想定される。従って本類型は、失敗を恐れず能動的な目標遂行を志向する上、揺ぎ無い肯定的自己観から自己を否定的に捉える機会そのものが少ないことが考えられる。また、課題に対する重圧感も少ないことから、たとえ失敗経験に直面しても思考の切り替えが早い認知特性が推測される。

誇大-過敏特性両向型 高目標設置とミスへのとらわれが高く、自己肯定感は平均水準だが、自己嫌悪感が高い。また、他指標は何れも高い。この結果は、社会恐怖認知モデルの信念を余す所なく反映するものであり、高目標設置と自己肯定感にて過敏特性優位型とは異なる側面が見受けられた。

鍋田(2007)は平均的対人恐怖症では、他者に受容される必須条件を“理想的な自己を提示し続けること”としながら、実際の現実自己が理想に見合うとは決して判断されないことを指摘する。また、脆弱な現実自己を強迫的に隠蔽する度に失墜を繰り返し、常に到達点なき理想探求を志向するため、強い対人緊張が形成されると指摘した。過敏型自己愛でも完全主義に関連する指摘が見られ(上地・宮下, 2004; Mann, 2004), 不完全を許容できないことから“到達不能な高い理想像”を強迫的に完全追及せざるを得ず、結果として他者からの肯定的評価に依存・固執することが示唆される。従って、本類型は“高い要求水準を達成すべし”と“失敗は絶対に許されない”との非現実的な両命題の板挟みになる上、不完全性の隠蔽を目的として完全主義・強迫性にて対処せざるを得ないことが考えられる。また自己肯定感についても、強い自己嫌悪感の脅威に晒され続けるため、不安定な自己観に陥り易く、対人関係における被害的認知や失敗を考え込む悪循環から抜け出せない認知特性が示唆される。

誇大-過敏特性両貧型 高目標設置とミスへのとらわれが低く、自己肯定感は平均だが、自己嫌悪感は低い。また、他指標は何れも低い。清水他(2007)では、

社交性・積極性は乏しいが他者関係に執着しないですむために安定しており、清水他(2008)でも、内的葛藤の少なさと精神的健康の高さが指摘される。本類型は、自己に高い目標を課すこともなければ失敗を恐れることが少ないため、安定した自己観を持つ。また、他者視線に被害的になることや失敗を否定的に考え込むことも少なく、楽観的とも言える認知特性が示唆される。

中間型 高目標設置とミスへのとらわれは平均を下回るが、他指標は平均的水準にある。本類型は自己に過度な目標を課すことも失敗を恐れることも少なく、標準的な自己観を持つ。また、被害的認知や過去の失敗を考え込むことも少なく、安定した認知特性が示唆される。

分析 2

結果と考察

Table 2 および Figure 2 に示されるように、誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型は、共にネガティブな反すう・統制不能・不合理な信念・自己関係づけにて高得点を示し、有意な差は見られなかった。これらは、両類型にて共通する認知特性と考えられる。一方、高目標設置と自己肯定感では有意な差が示されたことから、完全主義と自己観には両類型の相違がうかがえる。

分析1では、認知特性を類型論的に捉えたため、断片的言及に留まった印象は否めない。これを補完するため、分析2では相違が推測された完全主義と自己観を連続変数として扱い、2次元モデル全体から認知特性の検討を行う。まず、完全主義の2下位尺度に対して主成分分析を行い、「完全主義・合成得点」を算出した。次に、自己観を構成する自己嫌悪感・自己肯定感の2下位尺度に対して主成分分析を行い、「否定的自己観・合成得点」を算出した(Table 3)。完全主義・合成得点の高さは、高目標設置とミスへのとらわれの強さを示し、否定的自己観・合成得点は、自己嫌悪感の強さと自己肯定感の弱さを示すものである。そして、2次元モデル全体における両合成得点の布置関係を検討

Table 3 完全主義と否定的自己観における主成分分析の結果

| 完全主義 | 重み係数 | 否定的自己観 | 重み係数 |
|-----------|------|-----------|------|
| ミスへのとらわれ | .87 | 自己嫌悪感 | .83 |
| 高目標設置 | .87 | 自己肯定感 | -.83 |
| 累積寄与率 (%) | 76.3 | 累積寄与率 (%) | 69.4 |

するため、従属変数に両合成得点を、独立変数に主効果項として2次元モデル軸である対人恐怖心性と自己愛傾向（各々にて平均からの偏差に換算するセンタリング処理を実施）と、その交互作用項（主効果項の積）を設定した階層的重回帰分析を行った（Aiken & West, 1991）。

その結果、両従属変数とも主効果項は有意であったが、交互作用項は有意ではなかった（Table 4）。また、回帰式を元に自己愛傾向および対人恐怖心性が-1SD・Mean・1SDの場合における両合成得点の予測値を単回帰直線にて示した（Figure 3-1, 3-2）。完全主義・合成得点では、対人恐怖心性と自己愛傾向の2軸が共に高くなる場合（誇大-過敏特性両向型）にて最大値を示し、2軸が平均水準である場合（中間型）にて平均を、2軸が共に低くなる場合（誇大-過敏特性両貧型）にて最小値を示した。また、否定的自己観・合成得点では過敏特性優位型にて最大値を、中間型にて平均を、誇大特性優位型にて最小値を示した。この結果を踏まえて、Figure 4では2次元モデル全体にて推測される完全主義の右上りの斜交軸、否定的自己観の緩やかな右下がりの斜交軸、加えて対人恐怖心性の強い2類型にて共通する認知特性を概観した。Figure 4に見られるように誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型は、極端な思考体系、他者視線の被害的認識、事後の嫌なことを考え続ける認知特性を共通点として持っている。しかし、一方で誇大-過敏特性両向型では強い完全主義を、過敏特性優位型では強い否定的自己観を特徴とする点に相違が示された。この2類型における相違は、対人恐怖と社会恐怖の捉え方の差異に強い関連性を持つものと考えられる。

Table 4 完全主義と否定的自己観における階層的重回帰分析

| | 投入変数 | R ² 変化量 | 回帰係数 |
|------------------------|--------|--------------------|--------|
| 従属変数：完全主義・合成得点 | | | |
| (Step 1) : A | 対人恐怖心性 | .089* | .024* |
| (Step 2) : B | 自己愛傾向 | .098* | .026* |
| (Step 3) : A × B | 交互作用 | .000 | .000 |
| R ² 累積 (切片) | | | .001 |
| 従属変数：否定的自己観・合成得点 | | | |
| (Step 1) : A | 対人恐怖心性 | .359* | .056* |
| (Step 2) : B | 自己愛傾向 | .067* | -.029* |
| (Step 3) : A × B | 交互作用 | .000 | .000 |
| R ² 累積 (切片) | | | .000 |

**p* < .05

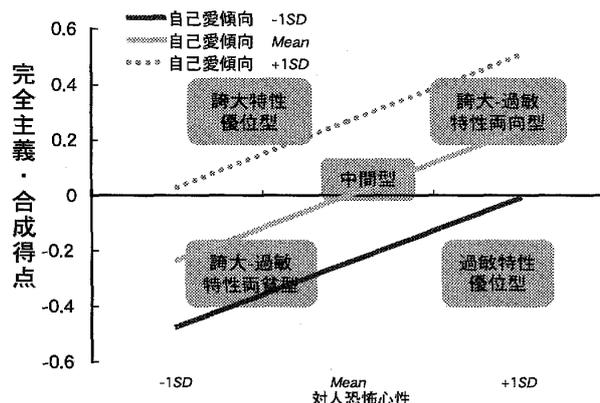


Figure 3-1 完全主義における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連

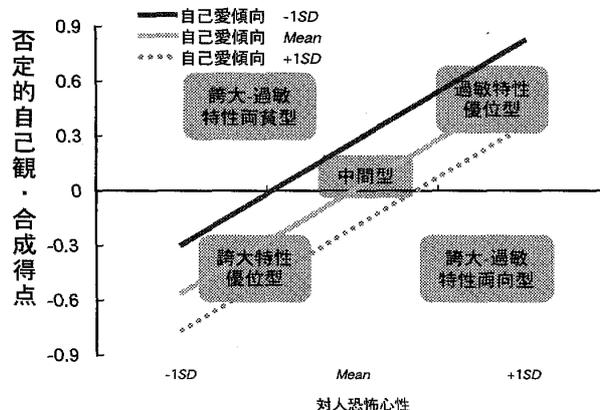


Figure 3-2 否定的自己観における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連

対人恐怖と社会恐怖について

牛島 (2004) は、対人恐怖 (森田, 1953) には対人緊張に加えて、症状を強迫的に否定するために、かえって不安が増幅される“とらわれ”が顕著であるとした。しかし、対照的に社会恐怖では本現象が希薄であることを示唆している。また、“対人恐怖は限りなく強迫性障害に近づき、社会恐怖は健常者の対人緊張の強さを指し示す”とも述べており、これらは対人恐怖と社会恐怖の異質性に触れる指摘だと考えられる。

本研究の結果は本指摘に沿うものであり、森田(1953)が着目した対人恐怖に該当する誇大-過敏特性両向型では、脆弱な現実自己を覆い隠すための完全主義・強迫性と不安定な自己観が示唆された。それに対してDSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000 高橋他訳 2002) の社会恐怖に該当する過敏特性優位型では、完全性の追求態度は希薄であるが、失敗への強い恐れや定着化した否定的自己観が示唆された。この非臨床類型である2類型に見られた相違は、牛島 (2004)

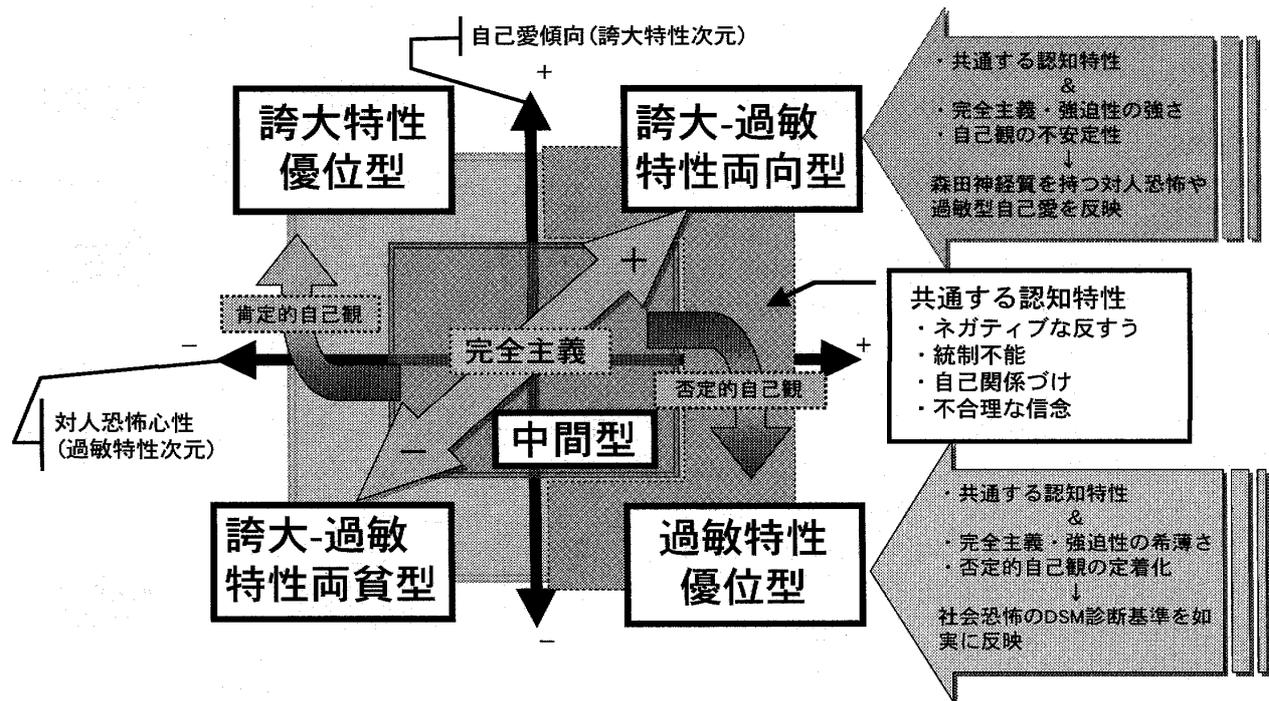


Figure 4 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける完全主義と自己観の関連, および対人恐怖心性の強い 2 類型の特徴

が触れた対人恐怖と社会恐怖の相違を支持する知見であると考えられる。

また、誇大-過敏特性両向型は、高い理想を掲げ続けるために不完全状況を招きやすく、不安を受容できない実情に対して更なる完全性にて対応する“強迫的な防衛方略”が想定される。これは精神相互作用・思想の矛盾・完全欲に代表される森田神経質（北西, 2001）を下地に持つことが考えられる。また過敏特性優位型は、自己効力感の弱さと失敗への恐れを併せ持つため、不安状況にて“回避的な防衛方略”を用い、結果的に当該場面に対する恐れを強化させている可能性が考えられる。このように 2 類型は羞恥感情を恐れ、それを受容できない点では一致を見せているが、具体的な防衛・対処手段には一定の隔たりが推測される。

これは、対人緊張に苦しむ青年群を援助する際に求められる視点とも関連するものと考えられる。本研究の結果は、同じように対人緊張を悩みの主題とする青年群であっても、必ずしも全員が画一的な背景要因や対処方略を持つとは限らないことに言及するものである。今後は、社会恐怖と対人恐怖の差異に焦点を当てながら、実際の青年に対するアセスメントの精緻化や適切な介入方法の策定・選択基準に発展が望まれる。

ただし、これまで対人恐怖は「社会恐怖における文

化特異的な一亜型」との曖昧な位置づけにあったように、両概念の識別には様々な見解が混在する。例えば、谷 (1997) は社会恐怖と対人恐怖の違いを相互独立的自己観と相互協調的自己観に見られる文化的自己観の差異から説明した。そして、前者は他者関係の中で自己の埋没を恐れるために形成され、後者は他者関係に対する過剰な配慮から形成されることを示唆した。このように、対人恐怖と社会恐怖の厳密な分類には、様々な観点があるため、本知見のみから結論を導くことは早計である。従って、本研究で示した対人恐怖と社会恐怖の異同は、あくまで強い対人緊張を持つ一群に対する森田 (1953) と DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000 高橋他訳 2002) の切り口に由来・限定されるものと理解した上で、今後の多様な知見の蓄積を待ちたい。

最後に、本研究で援用された社会恐怖認知モデルは、不安喚起場面に特化したものであるため、青年期の一般的な特性から検討された本知見には限界が含まれることに留意が必要である。しかし、アナログ研究として対人緊張と自己愛の相互関係から青年の認知特性における関連性が示され、これまで実証的に触れられることの少なかった社会恐怖と対人恐怖の異同に焦点が当てられたことは、一定の成果ではないかと思われる。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression : Testing and interpreting interactions*. Newbury Park, CA : Sage.
- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., text revision ; DSM-IV-TR). Washington, DC : Author. (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳) (2002). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)
- Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg (Ed.), *Social phobia : Diagnosis, assessment, and treatment* (pp. 69-93). New York : Guilford Press.
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM-IV edition*. Washington, DC : American Psychiatric Publishing. (ギャバード, G. O. 館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的臨床精神医学 その臨床実践 DSM-IV版臨床篇 ; II軸障害 岩崎学術出版社)
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, **21**, 43-51. (Horii, T., & Ogawa, T. (1997). The construction of the scale for the measurement of anthropophobic tendency (second report). *Psychological Report of Sophia University*, **21**, 43-51.)
- 伊藤 拓・竹中晃二・上里一郎 (2001). うつ状態に關与する心理的要因の検討—ネガティブな反すうと完全主義, メランコリー型性格, 帰属様式との比較—健康心理学研究, **14**, 11-23. (Ito, T., Takenaka, K., & Agari, I. (2001). Study for psychological factors related to depression : A comparison between negative rumination, perfectionism, melancholic personality, and attributional style. *Japanese Journal of Health Psychology*, **14**, 11-23.)
- 上地雄一郎・宮下一博 (2004). もろい青少年の心—自己愛の障害— 北大路書房
- 金子一史 (2000). 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, **48**, 473-480. (Kaneko, H. (2000). The self-reference tendency in adolescents. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 473-480.)
- 金子一史・本城秀次・高村咲子 (2003). 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 パーソナリティ研究, **12**, 2-13. (Kaneko, H., Honjo, S., & Takamura, S. (2003). The relationship between self-reference and social phobic, depression, and school absenteeism tendencies. *Japanese Journal of Personality*, **12**, 2-13.)
- 北西憲二 (2001). 我執の病理 白揚社
- 小堀 修・丹野義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 34-43. (Kobori, O., & Tanno, Y. (2004). Development of Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory. *Japanese Journal of Personality*, **13**, 34-43.)
- Kocovski, N. L., Endler, N. S., Rector, N. A., & Flett, G. L. (2005). Ruminative coping and post-event processing in social anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, **43**, 971-984.
- 児玉昌久・片柳弘司・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 大学生におけるストレスコーピングと自動思考, 状態不安, および抑うつ症状との関連 ヒューマンサイエンスリサーチ, **7**, 14-26.
- Mann, M. P. (2004). The adverse influence of narcissistic injury and perfectionism on college students' institutional attachment. *Personality and Individual Differences*, **36**, 1797-1806.
- 水間玲子 (1996). 自己嫌悪感尺度の作成 教育心理学研究, **44**, 296-302. (Mizuma, R. (1996). The construction of self-disgust scale. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 296-302.)
- 森 治子・長谷川浩一・石隈利紀・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 不合理な信念測定尺度 (JIBT-20) の開発の試み ヒューマンサイエンスリサーチ, **3**, 43-58.
- 森田正馬 (1953). 赤面恐怖の治し方 白揚社
- 鍋田恭孝 (2007). 思春期臨床の考え方・すすめ方 金剛出版
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理 サイエンス社
- 西岡和郎 (1999). 対人恐怖症とパーソナリティ 精神科治療学, **14**, 753-759. (Nishioka, K. (1999). Social phobia and personality. *Japanese Journal of Psychiatric Treatment*, **14**, 753-759.)
- 岡田 努・永井 徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, **60**, 386-389. (Okada, T., & Nagai, T. (1990). Self-esteem and anthropophobic-tendency in adolescents. *Japanese Journal of Psychology*, **60**, 386-389.)

- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Ronningstam, E. (1998). *Disorders of narcissism : Diagnostic, clinical, and empirical implications*. Washington, DC : American Psychiatric Press. (ロニングスタム, E. 佐野信也 (監訳) (2003). 自己愛の障害—診断的, 臨床的, 経験的意義— 金剛出版)
- Rosser, S., Issakidis, C., & Peters, L. (2003). Perfectionism and social phobia : Relationship between the constructs and impact on cognitive behavior therapy. *Cognitive Therapy and Research*, **27**, 143-151.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16. (Shimizu, K., Kawabe, H., & Kaizuka., T. (2007). The interrelationship between an anthropophobic tendency and narcissistic personality in adolescence. *Japanese Journal of Psychology*, **78**, 9-16.)
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, **16**, 350-362. (Shimizu, K., Kawabe, H., & Kaizuka., T. (2008). Social phobic tendency, narcissistic personality, and mental health. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 350-362.)
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, **56**, 179-185.
- 鈴木伸一・神村栄一 (2005). 実践家のための認知行動療法テクニックガイド 北大路書房
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, **45**, 254-262. (Tani, F. (1997). Ego identity and anthropobic tendency in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 254-262.)
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学—認知行動理論の最前線— 日本評論社
- Trumpeter, N., Watson, P. J., & O'Leary, B. J. (2006). Factors within multidimensional perfectionism scales : Complexity of relationships with self-esteem, narcissism, self-control, and self-criticism. *Personality and Individual Differences*, **41**, 849-860.
- 牛島定信 (2004). 人格の病理と精神療法 金剛出版

付 記

本研究は日本学術振興会特別研究員研究奨励費 (課題番号: 18・5367) の補助を受けた。

(2008.8.29 受稿, '09.8.27 受理)

Appendix 1 TSNS-S による 5 類型の分類基準
(清水・川邊・海塚, 2008)

| 類型 | 分類基準 |
|------------|--|
| 過敏特性優位型 | 対人恐怖心性領域が 37.6 点以上であり、同時に自己愛傾向領域が 35.7 点以下の範囲にある中で、なおかつ中間型ではないもの |
| 誇大特性優位型 | 対人恐怖心性領域が 37.6 点以下であり、同時に自己愛傾向領域が 35.7 点以上の範囲にある中で、なおかつ中間型ではないもの |
| 中間型 | 対人恐怖心性領域が 33~42 点の範囲にあり、同時に自己愛傾向領域が 32~40 点の範囲にあるもの |
| 誇大-過敏特性両向型 | 対人恐怖心性領域が 37.6 点以上であり、同時に自己愛傾向領域が 35.7 点以上の範囲にある中で、なおかつ中間型ではないもの |
| 誇大-過敏特性両貧型 | 対人恐怖心性領域が 37.6 点以下であり、同時に自己愛傾向領域が 35.7 点以下の範囲にある中で、なおかつ中間型ではないもの |

*Cognitive Traits in People With Anthropophobic Tendencies :
A Two-Dimensional Model of Narcissistic Personality Comparing
Anthropophobic and Social Phobic Symptoms*

KENJI SHIMIZU (SHINSHU UNIVERSITY) AND HISAYO OKAMURA (HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2010, 58, 23-33

The aim of the present study was to investigate the relation between a 2-dimensional model of social phobic tendencies and narcissistic personality and cognitive features. Cognitive traits were measured using the dysfunctional belief in social phobia cognitive model developed by Clark & Wells (1995). Questionnaires including the TSNS-S (Two-dimensional Model of Social Phobic Tendency and Narcissistic Personality-Short version), perfectionism, self-affirmation, self-disgust, negative rumination, irrational beliefs, and self-reference were completed by 595 university undergraduates (302 women, 293 men ; average age, 19 : 4 years). In Analysis 1, adjusted or maladjusted phases of 5 subtypes of the 2-dimensional model were demonstrated from various cognitive features. In Analysis 2, anthropophobic symptoms and social phobic symptoms were compared in detail.

Key Words : social phobic tendency, narcissistic personality, cognitive traits, university students